

Sunshine Letter Connect

Vol. **03**

2026
APRIL



野口聡一

巻頭インタビュー

英語がつかないだ、私の未来

「どれほど技術が発展しても
気持ちを伝え合う力の大切さは
ずっと変わらない」



特集

言語活動の充実

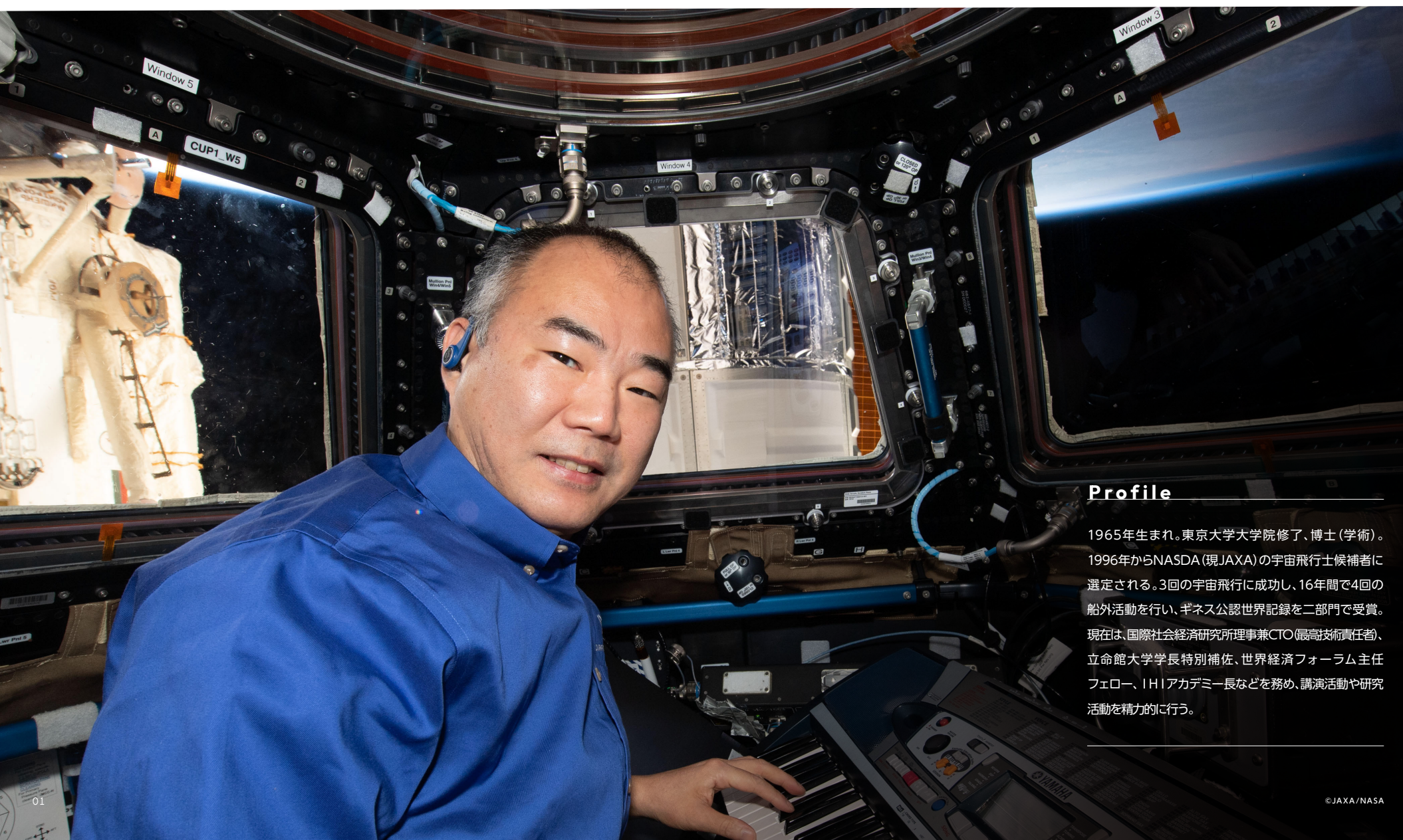
— 外国語指導助手 (ALT) とつくる授業 —

INTERVIEW

— 英語がつないだ、私の未来

どれほど技術が発展しても 気持ちを伝え合う力の大切さは ずっと変わらない

宇宙飛行士
のくちそういち
野口聡一



Profile

1965年生まれ。東京大学大学院修了、博士(学術)。1996年からNASDA(現JAXA)の宇宙飛行士候補者に選定される。3回の宇宙飛行に成功し、16年間で4回の船外活動を行い、ギネス公認世界記録を二部門で受賞。現在は、国際社会経済研究所理事兼CTO(最高技術責任者)、立命館大学学長特別補佐、世界経済フォーラム主任フェロー、IHIアカデミー長などを務め、講演活動や研究活動を精力的に行う。

日本を代表する宇宙飛行士の一人として活躍した野口聡一さんは、これまでに3回の宇宙飛行を経験し、スペースシャトルと国際宇宙ステーションの双方でミッションに参加してきました。長期滞在や船外活動など、数々の重要な任務を担い、日本人宇宙飛行士の活動領域を大きく広げてきた存在です。

.....

— 高校時代に、スペースシャトル「コロンビア号」の打ち上げをご覧になったことが、宇宙飛行士を志すきっかけになったそうですね。

「はい。アメリカのスペースシャトル、コロンビア号の打ち上げをテレビで見ました。その瞬間、『こういう仕事があるんだ』と強く印象に残ったのです。ただ、当時は、宇宙飛行士になるための道筋がはっきりと見えていませんでした。高校生の自分に何ができるのかと考えたとき、まず思い浮かんだのが『英語』でした。」

— それはどうしてでしょうか。

「宇宙に関わる仕事は、日本国内で完結するものではない、ということだけは明確だったからです。当時、ロケットを持っていたのはアメリカやソビエト連邦でした。宇宙に行くなら外国人と一緒に仕事をすることが前提になります。つまり、英語でコミュニケーションが取れなければ、そのスタートラインにも立てない。そう考えて、高校時代から『英語で生活し、英語で仕事ができるようになること』を意識していました。」

— 学校の勉強以外でも英語を学んでいたのですか。

「今のようにインターネットや英会話スクールが充実している時代ではありませんでしたので、できることは限られていました。学校の授業以外では、NHKのラジオ英語講座をよく聴いていましたし、当時民放で放送されていた『百万人の英語』という番組も活用していました。」

それから、もうひとつ役立ったのが米軍基地向けのラジオ放送です。当時住んでいた神奈川県は米軍基地が多く、FEN(現在のAFN)が受信できました。洋楽が好きだったこともあり、ラジオを24時間流しっぱなしにして、勉強のBGMのように英語を浴びていました。意味がすべてわかっていただけではありませんが、英語のリズムやテンポに慣れることができたのは、とてもよかったと思います。」



— 夢をかなえて宇宙飛行士になり、NASAで訓練や仕事に取り組まれるようになって、学んだ英語をどのように生かされたのかお聞きしたいと思います。多様なバックグラウンドを持つ人たちとチームを組むにあたり、最初は戸惑いもあったのではないのでしょうか。

「もちろんありました。NASAには、国籍も文化も価値観も異なる人たちが集まっています。多様性のあるチームでは、意見の衝突や不和は避けられません。似た者同士だけで集まれば、確かに仕事はスムーズに進むかもしれませんが、それでは大きな成果は生まれにくい。大切なのは、違いを無理に抑え込まないことです。お互いの意見や考えをきちんと言葉にして伝え合い、その中で妥協点やよりよい方法を探していく。そうして初めて、多様性が「強み」として生きてくるのだと思います。」

— チームで働くうえで、特に印象に残っている言葉があるそうですね。

「はい。私にとって初飛行だったSTS-114ミッションで、船長を務めておられたアイリーン・コリンズさんから教わった言葉です。“Know your job, do your job, and communicate.”

まず、自分に何が求められているのかを理解すること。次に、その役割をきちんと果たすこと。そして、それを相手に伝えることです。新人の頃は、『自分はこのことができる』『あれもやりたい』とアピールしたくなりがちですが、まず大切



なのは、チームから何を求められているのかを正しく理解することです。そして、伝える際には、相手が理解し、行動に移せる形で届ける必要があります。『言つつもり』『聞いたつもり』では、コミュニケーションとは言えません。」

— その重要性を、強く実感した場面はありましたか。

「まず思い出すのは、宇宙での緊急事態です。船外活動中にパディ(※)の手袋が切れたかもしれない、という状況がありました。宇宙空間では、手袋の破損は命の危機に直結します。そんなときだからこそ、冷静なコミュニケーションが必要でした。」

無線で状況を正確に共有し、今何を最優先すべきかを全員が理解して行動する。パニックになりそうなきほど、落ち着いたコミュニケーションと、日頃から築いてきた信頼関係が力を発揮します。最低限の言葉でも、意図が正確に伝わる状態を作っておくことが重要なのです。」

※二人一組で行動する「パディシステム」の相手のこと。宇宙という過酷な環境で、安全かつ確実に業務を遂行するために、船外活動は必ずパディシステムで行う。

— 最低限の言葉でも意図を正確に伝えるためには、何が大切だと思われますか？

「言葉はルールだけで動いているものではなく、『生き物』だと思っています。実際にその言語を使っている人たちが、どんな場面で、どんな表現を使っているのかに触れることが大切です。日本語から英語に直訳するのではなく、『この場面では、こう言う』という形で覚えて、自分でも使うようにすると自然な言葉が身についていきます。」

— 極めて速いスピードでAI翻訳技術が発展する今、外国語を学ぶ意義についてはどのようにお考えですか。

「AIはとても優れたツールですから、積極的に使えばいいと思います。ただ、情報を伝えるだけでなく、気持ちや信頼を伝える場面では、やはり人と人が直接言葉を交わすことが欠かせません。同じ言葉を使おうとする姿勢そのものが、相手へのリスペクトになるのだと思います。」

— 最後に、野口さんにとっての「つながり」について教えてください。

「人とのつながりとは、『喜び』そのものだと思います。損得勘定のようなものは抜きで『この人のために何かしたい』と思える関係ができることは、何事にも代え難いものです。外国語を学ぶことは、自分の世界を広げ、つながりを増やすための第一歩です。将来、やりたいことや見たい世界が日本の



外にもあるのなら、外国語は大きな助けになります。どれほど技術が発展したとしても、初めて会う人と気持ちを伝え合う力の大切さはこれからもずっと変わりません。同じ言葉を使うことで生まれる『つながりの喜び』を、ぜひ大切にしてほしいと思います。」

Wonderful!.....





For Developing Meaningful English Classes



特集 学校訪問

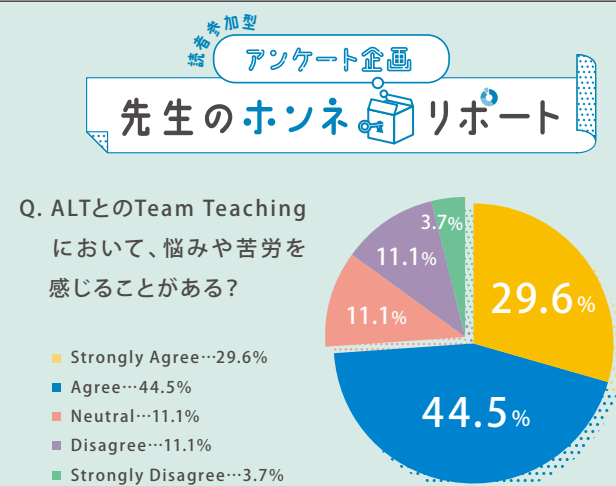
English lessons with ALT

言語活動の充実

— 外国語指導助手 (ALT) とつくる授業 —

千葉県千葉市立川戸小学校・川戸中学校

小中学校の英語教育では、子どもたちが実際に英語を用いてコミュニケーションを図る活動を通して資質・能力を育成することが重視されています。これを支える役割を担っている存在のひとつが外国語指導助手 (ALT) です。そこで今回は、充実した授業づくりのためのALTとの効果的な連携を特集しました。



ALTの役割と課題

ALTの活用は、児童生徒に生きた英語に触れさせ、異文化理解を促すうえで重要であることが文部科学省の調査などで示されている一方、学校現場ではALTとの連携について課題を感じる場面が多いという指摘があります。実際、本誌で行ったアンケートでも、同様の調査結果が得られました。具体的には、「連携のための打ち合わせや準備の時間が十分に取れない」「指導計画の作成や授業中の作業における役割分担があいまい」

などのご意見が寄せられました。

そこで今回は、1987年からALTを導入している千葉市立川戸小中学校への取材を行い、同校の川俣二千翔先生(小学校6年生・中学校1年生担当)、富塚由記先生(小学校5年生・中学校2年生担当)、鈴木直子先生(小学校3・4年生・中学校3年生担当)、ALTのRepollo Karena先生(通称:レナ先生)に、ALTとの連携がもたらす効果と、よりよい協働のための工夫について伺いました。



左から、川俣二千翔先生、富塚由記先生、鈴木直子先生、ALTのRepollo Karena先生。

川戸小中学校のALTとの連携

現在(取材時)、川戸小中学校では、3人の日本人英語教師と、1人のALTが小学校・中学校両方の英語の授業を担当しています。英語主任を務める川俣二千翔先生は、英語指導におけるALTの主な役割には大きく2つあると言います。

「ひとつは、児童生徒が海外の文化への興味をもつ助けになってもらうことです。ALTのレナ先生には、授業の中で、母国であるフィリピンの文化を楽しく伝えてもらうようお願いしています。もうひとつは、ゲームや言語活動の場面において、児童生徒のモデルになってもらうことです。」(川俣先生)

中学校では、会話練習の相手や発表のデモンストレー

ション、インタビューテストの面接官、英作文の添削など、より幅広い場面でALTが関わり、生徒が生きた英語を実践的に学べる授業づくりを目指しています。日本人教師が主導しつつも、会話がメインの実践的な授業ではALTの出番を増やすなどして、役割分担をしているそうです。



イングリッシュルームには、ALTの出身国をはじめ、海外の文化や生活に関するポスターが掲示されています。



ALTも机間指導を行い、児童生徒とコミュニケーションを取っています。

ALTとの交流が「学びの必然性」をつくる

ALTと児童生徒との関係づくりも学びの大事な要素です。授業中だけでなく休み時間にコミュニケーションを取ったり、掲示物などでALTからのメッセージを伝えたりして、日常的な交流も大事にすることが、学びへのモチベーションにもなるそうです。「児童生徒にとって、自分が話した英語がALTに初めて通じたときの喜びは大きいものです。デジタル教科書などで本物の英語の音声を聞くことはできますが、自分の英語が伝わるという喜びはやはり対面でのコミュニケーションだからこそ味わえることです。レナ先生がいることで、自分たちの文化や考えを伝えたいという切実な目的が子どもたちの中に芽生えて、『レナ先生と話せてよかった』という達成感を得ることができます。」(川俣先生)

「知ることで世界が広がる喜びもありますね。クリスマス

スの時期の授業では、レナ先生がフィリピンのごちそうである『レチョン(豚の丸焼き)』など、日本と違うクリスマスの風景や風習を教えてくださいました。子どもたちの振り返りシートには『もっと知りたい』『他の国のことを知ることができ、勉強になった』といった感想が多く見られました。」(富塚先生)

ALTのレナ先生は、ALTのやりがいについて「生徒たちのビビッドな反応を見ると、皆の学びの助けになれてよかったとうれしく思います。」と言います。

取材を通して、教師とALTが円滑に連携を図り、それぞれの役割を果たすことで、児童生徒のコミュニケーションをより豊かにし、多文化共生、異文化理解をいっそう促進することに加え、先生方の「やりがい」につながっているのだと感じました。

ALTと共有すべき情報とは

ALTとの連携で学びの効果を上げるためには、情報の共有が必須だと先生方は話します。

「授業の前には、必ず打ち合わせを行うようにしています。授業のねらいや流れ、ゴールを共有することは、授業をスムーズに行うためにも不可欠です。また、単元全体の最終目標の共通理解を図ることも大切にしています。」(富塚先生)

多くの現場で聞かれる「時間不足」という課題への向き合い方についても伺いました。

「ALTの先生がどう動けばよいかわからずに困ることがないよう、児童生徒へのヒントの出し方や声かけの仕方、目線の配り方などは明確な言葉で伝えることで、短時間でも共有できるように工夫しています。また、授業の内容をすべて口頭で確実に伝えるのは難しいので、メモを用意して授業の流れや要点を伝えています。さらに黒板横のホワイトボードに授業の流れを書き、ALTと

共有する取り組みも行っています。児童生徒とも共有できるので、メリットは多いですね。」(鈴木先生)

こうした「見える化」の取り組みは、短い打ち合わせ時間を補い、協働を支える鍵となっています。



授業直前の打ち合わせの様子

We eat lechon at Christmas.

「子どもたちが私の指導を通して楽しみながら英語を学んでくれることがやりがいです。」(レナ先生)



結びに

— 川戸小中学校のALT連携を深める3つの取組み —

- ① 授業のゴールを共有(短時間でもメモを使って確実に)
- ② 授業の流れの見える化(ホワイトボード活用)
- ③ 日常的交流で「伝わる喜び」を育てる

A LTとの連携で 小学校外国語教育を より深める



● Profile

おおた
太田 しのぶ

福島県南相馬市立鹿島小学校
外国語専科教員

中学校教諭として13年間勤務。令和7年度より、ふくしま外国語教育推進リーダーとして、3校の小学校の外国語の授業を担当し、授業実践に向き合っている。

ALTとつくる単元のゴール設定

単元計画を作成する際は、児童が英語を使う必然性を感じられるよう、単元のゴールをALTと一緒に考え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を明確に設定しています。

例えば、Junior Sunshine 6 Lesson 2の日本文化紹介の単元では、偶然にも実施時期にALTの家族が日本を訪れることになっていました。そこで、ALTから「家族を案内するために、日本文化や、地域でおすすめの観光地について教えてほしい」と児童に伝えてもらい、「ALTの家族に日本や鹿島のことを

Introduction

南相馬市では、「子どもが主役の授業」を目指し、全学年・全教科で統一したスタイルの授業づくりを行っています。教師がファシリテーターとなって、協働的な学びや振り返りの時間の充実を図り、子どもたちの資質・能力の育成に取り組んでいます。また、福島県より指定を受け、小・中・高の連携による外国語科におけるパフォーマンス評価の研究も進めています。その一環として、単元を通してALTと連携し、指導と評価の計画作成や言語活動の充実、評価後のフィードバックを通じて、深い学びへと繋げています。

好きになってもらえるようなスピーチをしよう」というゴールを設定しました。

また、Lesson 5の行きたい国を発表する単元では、ゴールを「ALTやクラスみんなが行きたくくなるようなツアープランを考えよう」としました。クラス全員分の行きたい国についてのスピーチを聞いたあとに、児童とALTがそれぞれ行きたい国に投票するルールにしたことで、その国の魅力がより伝わるような情報をスピーチに盛り込む児童の姿が見られました。

発表を再構築できる中間指導

単元ゴールに向けた言語活動においては、JET(英語専科教員)とALTによる中間指導を行い、児童が発表をブラッシュアップし、再構築できるようにしています。

Junior Sunshine 6 Lesson 6 “My Best Memory”の実践では、1回目の中間指導で、友だち同士でやり取りしたことを基に、発表内容に1文を追加して改善を図ったペアをJETが紹介しました。

2回目は、英語話者であるALTが言語面や内容面でよいパフォーマンスをしていると判断した児童を

指名して発表を共有し、3回目は多くの児童に共通して見られた表現の誤りを取り上げて、学習改善に向けた指導を行いました。児童同士のやり取りだけでは改善を図ることが難しい状況を見取った場合は、ALTと児童とでやり取りをするようにしています。ALTと役割分担をして中間指導を行うことで、言語活動を通して児童自ら学習改善を図る力が身につけてきたと感じています。

パフォーマンステストの評価

パフォーマンステストでは、JETとALTで評価基準を決め、ALTと評価しています。評価基準は、最初の3~4人の児童のパフォーマンスを基に(b)評価の児童の姿を定め、さらにこの表現が言えたら(a)評価、この表現が言えないと(c)評価と具体的に決め、公平性を図ります。

事後には、よくできていた児童のよい点や、多くの児童ができるようになったことをALTに紹介してもらいます。児童が次のパフォーマンステストに向けて新たな目標を立てられるように、また児童の学習の改善につながるように、評価がしやすいルーブリックの作成と、わかりやすいフィードバックを心がけています。



図2:児童同士の言語活動の様子



図3:JETとALTによる評価の様子

おわりに

ALTと日常的にコミュニケーションを取ることは、ALTとの良好な関係の構築だけでなく、自身の英語力の向上にも大切だと感じています。私自身、まだALTと会話をする際、言いたいけれど言えないことがたくさんあります。しかし、伝えたい内容を整理して話せば確実に伝わることも多く、試行錯誤した分、喜びを感じることが出来ます。私は相手に伝わることの喜びや楽しさが英語学習の醍醐味であると強く感じています。この醍醐味を多くの児童に味わってもらいたいと日々願い、授業に向き合っています。



図1:ALTが児童に向けて送ったビデオレター

誰もが輝ける英語の授業づくり

～特別支援の観点から～

Vol.3

「居てもいいんだ」と思わせる 授業の組み立て方

アメリカの教育学者ウィギンズとマクタイが提唱した「バックワードデザイン」という言葉をお聞きになったことがあると思います。これは、まず学習到達目標を決め、それから評価方法、学習内容、指導方法を決定する考え方です。指導者には、目の前の学習者の実態や学習状況を確認しながら、指導方法、学習内容等をフレキシブルに調整することが求められます。

授業の学習活動には、表に示すように、学習者の挑戦を促すものと安心して取り組めるものがあります。

どちらも学習者の能力を伸ばすには有効なものですが、どちらか一方の極に偏ると、一部の学習者には居場所がないと感じられるようになるおそれがあります。英語の授業では、その場で即興的にやり取りをしたり、話したりする力を育成するための学習活動が多く行われます。学習者の中には、予告なく指名されたり、準備していないことを問われたりするなど、即時の対応を求められることが苦手で、突発的な態度をとってしまう子どももいます。

すべての学習者が参加できるように、2極の偏らない多様な学習活動を設定し工夫することは、まさしく「誰もが輝ける授業」につながるのではないのでしょうか。

表：授業における学習活動の2つの極

挑戦・達成感	帰納的	⇔	演繹的	スムーズ・安心感
	即席	⇔	準備	
	暗示的	⇔	明示的	
	曖昧性	⇔	明確性	
	マルチタスク	⇔	シングルタスク	
	単感覚	⇔	多感覚	
	challenge	⇔	small steps	
	jumping	⇔	scaffolding	



いいじま むつみ
飯島 睦美

群馬大学 理事・副学長(教育・評価担当)

英国パーミンガム大学修士。
大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位満期取得退学。

column

隣の英語ビートル Vol.3

仕事で英語を活用するさまざまな職業の方に、「英語の学び方」や「英語を身につけてよかったこと」をインタビューする本コーナー。第3回に登場するのは、アメリカの動物園・水族館で展示ディレクターとして活躍する本田公夫さんです。

「好き」を追いかけた先で英語は
「世界とつながる道具」になった

幼い頃から動物や動物園に強く引かれていたという本田さん。中学生で動物園友の会の活動に参加し、野生動物や動物園の情報に飢えていました。情報を得る過程において、英語は欠かせない存在でした。「英語そのものにも興味がありましたが、英語の本を読まない、知りたいことにたどり着けなかったんです。」

当時、日本語で読める野生動物の情報は限られていたため、洋書や海外雑誌に触れることが必然でした。その中で、英語表現の奥行きにも引かれていきます。「原書と翻訳書を見比べると、英語には翻訳では伝わらないニュアンスがあることに気づきました。言葉のおもしろさを感じ、それからはできるだけ原文で読むようになりました。」

当時も今も、動物園で働く道は決して広く開かれたものではなく、本田さんはもうひとつの興味関心だったデザインや書籍、その延長線上にある印刷会社への就職の道を選びます。その後のニューヨーク赴任で、人生の大きな転機が訪れます。それは、のちの職場となるブロンクス動物園との出会いでした。「動物の自然な姿を見せるように細部まで考えられた展示を見て、こんな場所があるのか、と衝撃を受けました。」

「こんな場所で働きたい」という思いを強くもった本田さんは、多くの壁にぶつかりながらも挑戦を重ね、



イラスト：大嶋奈都子

ほんだ きみお
本田公夫さん(動物園・水族館展示ディレクター)

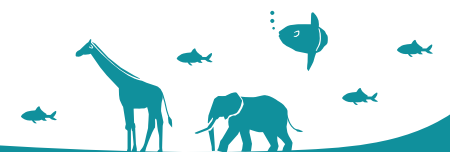
1958年長崎県生まれ。The Maritime Aquarium at Norwalk 展示ディレクター。2000年にブロンクス動物園の運営母体に所属し、その後19年間、傘下の5園館の展示デザインに携わる。著書に「動物園から未来を変える」(亜紀書房、川端裕人氏との共著)。

その夢をかなえます。

「決して順風満帆だったわけではありませんが、印刷技術や知的財産権の取り扱いなど、それまでの経験は無駄ではなかったとも感じます。『好き』という気持ちをもってれば、点と点はいつかつながるからこそ、自分の興味は掘り下げておくことが大切だと感じます。」

自身が長年携わってきた仕事について、本田さんは次のように語ってくれました。

「『伝える』をデザインするのが展示の仕事ですが、動物園・水族館の展示では利用者が動物そのもの以外に注意を向ける時間は限られています。その相手の立場に立って、いかに注意を引き、いかに少ない言葉で意図するメッセージを誤解なく伝えるかに日々努めています。」



読者参加型

アンケート企画

先生のホンネ リポート

学校現場での課題や工夫など、英語教育に携わる先生方の

ホンネを共有するアンケート企画をお届けします。

▶ 次号の特集テーマは「**評価の活用**」！ そこで……

今回のアンケートテーマはこちら！ **評価の結果、どう活用していますか？**

評価について、活用法やお悩みなど、先生方の**ホンネ**をお聞かせください！
回答は匿名で集計し、次号に掲載させていただくことがあります。

▶ アンケートにご協力ください！



1分で回答完了！

二次元コードから今すぐ参加！



開隆堂出版LINE
公式アカウント

友だち募集中！

明日からの授業に役立つ教材、指導事例から専門家による最新の研究報告まで、小中の英語教育に関する幅広い情報を発信しています。



Follow me!

@155fjwpt

第2回

雨にまつわる 英語表現



語彙指導で
単語は不平等に
扱おう！

「指導と評価の一体化」
を考える

佐藤 美智子 先生



2024年10月発行Junior Sunshine Letter! Vol.7 掲載
先生のお道具箱
~What's in your toolbox?~
[Vol.4]指導観、学習観をアップデートするICT活用法

▶ 実践記事はこちらからご覧ください

中学校デジタル教科書 みらいスクール 評価機能の使い方



主体的に学ぶ力の育成と
小学校外国語教育の課題

児童一人ひとりの
学びを生かす指導への転換



小・中学校 英語教育情報誌

Sunshine Letter Connect Vol.03

非売品

2026年4月3日印刷 2026年4月10日発行 編集兼発行人 井口廣之 デザイン ありがとう株式会社
発行所 開隆堂出版株式会社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1
☎ (03) 5684-6121 (営業)・5684-6118 (販売)・5684-6115 (編集) <https://www.kairyudo.co.jp/>



開隆堂出版株式会社

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎ 03-5684-6111

北海道支社 〒060-0042 北海道札幌市中央区大通西11-4-21 52山京ビル7階 ☎ 011-231-0403
東北支社 〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡3-10-7 サンライン第66ビル5階 ☎ 022-742-1213
名古屋支社 〒461-0004 愛知県名古屋市中区栄1-15-18 オフィスサンナゴヤ9階 ☎ 052-908-5190
大阪支社 〒550-0013 大阪府大阪市西区新町2-10-16 ☎ 06-6531-5782
九州支社 〒810-0075 福岡県福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階 ☎ 092-733-0174